ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「全員いるな？」

　山の麓。ボロボロで、最早字が読めなくなっている木板の前で、田島辰巳は弟子達の顔を確認する。コクンと頷くと、一言。

「よし、じゃあ、良助・拓馬・雅也は、各自この山を登れ。野生のポケモンが、今日の練習試合の相手だ……って、もう予想はついているみたいだな。山の中腹から先は、危険だから絶対に行かないこと！　三時間後、ここに集合だ。奈央は俺と一緒に、薬草を集めてくれ。以上、解散！」

　はいっ！　という元気な声を残して、早速三人とその相棒達が、山へと消える。その後に続いて、田島辰巳と奈央も山に入っていった。

「そろそろ帰らない？」

　山で戦い始めてから二時間半後のことだ。戻る時間を考えれば、そろそろ麓に戻ったほうがよさそうだと判断した――いや、実はそれだけではないのだが――拓馬が、二人にそう言う。

「そうしね？」

「そうする？」

　その提案に、二人もすぐに首を縦に振った。二人も、拓馬と同じことを考えていたのだ。三人が思っていたこと、それは……

　なんだか、いつもとはちがう。

　ということだ。普段はそんなことはないのだが、今日はなんだか霧が深いことに、三人は違和感を覚えていた。しかも、心なしか、いつもより戦闘回数が少ない。いつもは我先にと襲いかかってくる野生のポケモン達は、今日は静かだった。

「じゃあ、帰ろっか……」

「ああ」

　拓馬達が、回れ右をして山を降りる。

　だが、どこだったであろうか。

　不安を感じたまま、山を降り、そして麓までたどり着いた時、二人は気がついた。

　雅也がいないことに。

　そのころ雅也は、ピチューとリオルと一緒に、まだ山の中を彷徨っていた。

「良助、拓馬、どこ？」

　彼は大きな不安を抱えたまま、そう叫ぶ。もうどれくらい歩いたのか、彼には分からなくなっていた。時計は拓馬が持っているため、雅也は持っていない。

　お腹も空いてきて、めまいを覚え始めたとき、洞穴を見つけて、雅也はその中に入り、座り込んだ。

「おなかすいたー……」

　つい、そんな言葉が口から出たとき、彼は自分のパートナーの姿がどこにも見えないことに気が付く。不安がいっそう大きくなって、空腹感も忘れ、雅也は立ち上がって、洞穴を出た。

「ピチューっ？　リオルっ？」

　そう叫ぶも、返事はない。いつもなら、これですぐに自分のところに来るはずなのだが、今は来ないことに、雅也の仲の言いようのない不安感が、さらに大きくなっていく。

　その時だった。

「うわぁ！」

　霧が深く、前も足元もよく見えないせいで、雅也は何かにつまづいた。転ばんとせんとどうにか踏みとどまった雅也の目に、青いものと黄色いものが飛び込んでくる。

「み……見つけた」

　それがピチューとリオルだったことに遅まきながら気がついた雅也は、ほっと一息つく。手にモモンの実とナナシの実を持っているところを見ると、どうやら二匹は食べ物を探していたようだ。おそらく、主人がお腹を空かせていることに気がついたのだろう。

「まったく……どこにいっていたんだ！」

　それでも安堵から、雅也はついつい怒鳴ってしまった。そして、ビクッと体を震わせた二匹を、そっと抱きしめる。

「でも、まぁ……見つかってよかった……」

　さっきの洞穴で、二匹が見つけてきた木の実を一人と二匹であっという間に平らた雅也達は、洞穴を出た。勿論、この後も拓馬と良助を探すつもりなのだが、既に麓にたどり着いていることなど、雅也は露ほども知らない。

　当然彼にも、先に山を降りて二人を待つ、という選択肢もあった。今日は、なぜかあまり野生のポケモンに襲われないからだ。一人でも山を降りることは十分可能である。だが、この状態がずっと続くという保証も彼には無かったのも事実。故に雅也は、万が一の事を考え、二人と一緒に固まって行動することを選んだのだが……

　どれくらい歩いただろうか。時間の感覚も完全に無くなって、よろよろとした足取りで、雅也は山の中を歩いていた。ピチューとリオルはまだ元気そうで、フラフラしかけている雅也を両脇で支えている。

「……！」

　突然、視界を遮っていた霧が晴れた。空を覆う木々もなくなって、一人と二匹の目に、青空が飛び込んでくる。

　だが、そこは麓では無かった。

「あれ、なんでだろ？」

　彼等の感覚では、山の中腹あたりをグルグルと回っていたはずだった。しかしどうやら、知らず知らずの内に、山頂へと向かっていたらしい。後で師匠に怒られるとビクビクしながらも、二匹も首を傾げている。だが、そういえば、だんだんと空気が薄くなっていたことに気がついた。

「うそでしょ……？」

　信じられない、といった顔で、雅也は思わず呟く。数秒間、心の中で、自分の馬鹿さ加減を呪った後、自分の足元でガックリとしている相棒を見た。

「ごめん、もどろっか」

　力なくそう言うと、二匹も頷く。なんだか息苦しいし、ドッと疲れが出てきたので、二人を探すのは断念することにしたのだ。しかし――

「あれ……もしかして、僕、疲れちゃたたみたい……」

　突然、体の力が抜け、その場にへたりこむ雅也。なんとか出した声は、かなり弱々しかった。

「しばらく、ここで休もっか」

　だが、見れば、ピチューとリオルも、同じようにへたりこんでいる。そこで、雅也は、おかしい、と思った。相棒達は、さっきまで元気だったからだ。確かに精神的にくるものがあったとはいえ、この疲労感は異常だ。

「……！」

　そしてこの時、初めて雅也は、ここに、自分たちの他に、誰かいることに気が付く。疲労感が吐き気に変わるのを感じながらも、雅也はそいつの気配のする方向を見た。

「……」

　崖に、白い厚手のローブを纏った、赤黒い髪の人がこちらに背を向けて立っていた。後一歩進めば、崖から真っ逆さまに落ちてしまう、そんな危うい所に、そいつは立っていた。

「……誰？」

　恐る恐る、雅也はそいつに近づきながら尋ねる。返事は無い。

「誰……ですか？」

　一歩一歩近づくたびに、吐き気は強くなっていく。リバースするのだけは何とか防ぎつつ、雅也は再び尋ねた。口調を丁寧語に変えたのは、相手が自分より、かなり年上だと判断したからなのだが……

　雅也の声に、ようやく気がついたのか、そいつは振り向く。だが、雅也の目に飛び込んできたのは、予想よりはるかに幼さの残る男の顔だった。深緑色の目が、ほっそりと薄められる。

　その瞬間、雅也は自分が感じる吐き気が、恐怖に変わった事を感じた。後ろに突っ立っているピチューとリオルも、それを感じたように、一歩後ずさる。

「……君は誰？」

　それでも恐怖に負けまいと、雅也は声を振り絞る。そいつが、口を開いた。

「子供がここに、何のようだ？」

　あくまでも落ち着き払ったその声は、深く一人と二匹の心に突き刺さる。今すぐにでもここから逃げ出したい衝動に、彼等は駆られた。だが、まるで足が棒になってしまったかのように、全然動かない。

「まぁ、いいか……だけど、可哀想に」

「な……何が、ですか？」

　その瞬間、恐怖が、ピークに達した。

「この国で、一番最初に死ぬのが、君みたいな子供だなんて、さ」

　遅まきながらも、ようやく届いた脳からの命令が、雅也の足を動かした。思わず後ろに飛び退いて、尻餅をついた雅也だが、先ほど彼がいた場所には、黄土色の土に、直径二メートルほどの大きなクレーターが出来ていた。サッと、雅也の顔が青ざめる。

「ピ……ピチュー、リオル！」

　固まりかけた口と腕を賢明に動かしながら、雅也はローブの男を指差す。

「あいつに攻撃！」

　普段なら、雅也はこんなこと絶対にしない。多対一なぞ反則も甚だしいし、トレーナーをポケモンで攻撃するなど、ポケモントレーナーの風上にも置けない行為だと、田島辰巳に常日頃から言われていることだからだ。

　それでも、その約束を破ったのは、そうしなければ自分が殺されると、そう思ったからである。

「……ふぅーん、君、俺と戦うつもりなの？」

　命令からだいぶタイムラグはあったものの、それでも自身に襲いかかってきたピチューとリオルを見て、どこか面白そうに、男は呟いた。

「ピチュー、雷パンチ！　リオル、はっけい！」

「……」

　雅也の口から出た、二匹への命令を聞いて、男はスっと右手を前に出す。何をするかと思いきや、先に突っ込んできたリオルの頭をムズっと掴むと、そのままピチューの方へと放り投げる。

「……なっ！」

　空中で激突したまま地面に落ちた二匹を見て、雅也は思わず絶句する。こんな躱し方を、彼は今まで見たことがなかった。

「……ガブリアス、逆鱗」

　二匹を助けようと前に走り出した雅也に指を向けながら、男は言う。突如、雅也のすぐ後ろに、さっきよりもでかいクレーターが現れ、その衝撃で、雅也は前につんのめり、顔から地面にダイブした。

「い……いてて……」

「……もう一発」

　間髪を入れずに、男が言う。だが、今度は雅也とピチュー、リオルの間に、大きなクレーターが出来る。土が小さな欠片となって舞い上がる中、雅也の耳に、男の舌打ちの音が聞こえた。

「……混乱、か」

　スっと、男は腕をおろす。その瞬間、雅也の近くに、いや、もっと遠くにも、大小さまざまな形のクレーターが、いくつも現れる。叫びともとれない声を上げながらも、雅也もピチューもリオルも、一歩もそこを動けない。

　気がつけば、山の頂上は、隕石でも落ちてきたかのようになっていた。フッと、男が笑顔を見せる。混乱から立ち直ったのか、いつの間にか、今まで――恐らく、あまりの速さで目視することが出来なかったのだろうが――姿を見せなかったガブリアスが、怯える雅也達を見下ろしていた。その目が何を思っているのか、誰も理解出来ない。

「君、結構凄いんだね……今まで殺してきた奴は、二回目の逆鱗を見ることすら出来なかったっていうのに……」

　そして、スタスタと、男は雅也達に歩み寄ってくる。近くまできた時、歩みを止めた。興味深そうな、それでいて感情の無い目を雅也達に向ける。

「……俺はジャック」

「ジャ……ック？」

「君は？」

「雅也……青柳雅也」

　せめてピチューとリオルだけでも逃がそうと、雅也はモンスターボールの中に、二匹を戻しかけた手をはたりと止める。

「そう、覚えておくよ……ガブリアス」

　パチンと指を鳴らすジャック。雅也が、恐怖で固まった思考で、何をするのだろう、という言葉をひねり出した時――

　気がつけば、雅也達は、ガブリアスに背中から持ち上げられていた。

「……ここまで逃げ切った、ご褒美だ」

　ガブリアスは、そのまま崖のところまで、雅也達を持っていく。彼等は、遠い場所に、地面があることを知る。

「……運が良ければ……助かるかもね」

　ジャックがそういった瞬間、雅也達は、何をするのか……いや、何をされるのかを悟る。

「やっ……」

「落とせ」

　ジャックのその声が聞こえた瞬間、自身を支えていた力が消えるのを、雅也は感じた。

「うわぁぁぁ！」

「ピチュゥゥゥ！」

「リオォォォ！」